

我が國の人々の対中感情が概ね良好であったのは、往時の中国の対日姿勢が「白猫であれ黒猫であれ、鼠を捕るのが良い猫である」という鄧小平の言葉に暗示されるように柔軟にして実利的な印象を与えるものであったからである。それは、「ミスター・ニエット」と呼ばれたアンド烈・クロムイコに象徴されるよう

ソニに「台灣問題は百年後でよい」と言明した毛沢東とは対照的に、胡主席麾下の中国政府は、台灣を念頭に置いた「反国家分裂法案」を成立させ、却つて國際社会の疑惑を呼び起こしている。

対日関係に至つては、中国政府の姿勢は、四月の「反日」騒動沸騰の折に日本在在外公館の保護を全うできなかつ

うな一大国際行事を開催する資格に疑問符を付す声が米国連邦議会から上がるのも、自然な成り行きであろう。

国政府における「外交感覚」の劣化は、率直に寒心に堪えないものである。

今後の我が国が相対する中国外交は、昔日のクロムイコと同様に辟易させられるところの多いものかもしれない。昨今の中国政府の対日姿勢は、日本に対しても、無理が通れば道理が引っこむ」とでも表現すべき論理に抛つてある。

の下に晒すことである。東シナ海海洋権益の扱
関していえば、我が国政
主張する「日中間線」
自体が対中配慮の產物
り、中国政府がその配慮
視する形で自らの主張を
返しているという事実は
れだけ国際社会に認知さ
いるのであろうか。

我が国にとって対外交の相手は、ただ中国一国のみではなく、日中関係の動向に影響を受ける幾多の国々である。我が国は、対中関係の運営に際して他の国々の「共感」を獲得すべく手を尽くさなければならない。我が国には、対中「感情」に眼を曇らせておられる暇はないのである。

ない情勢分析と国家の長い歴史経験から生み出された知恵という同じ伝統を背後に持つており、恒久的なものと戦術的なものを見分ける直感を有していた。：中国の指導者達の姿勢は、精神的に遼に安定した社会を代表していた。彼らは細かい点を詰めることよりも信頼関係をつくり出すことに大きな关心を寄せた

ら「(彼らとは) ビジネスができる」と思ったのである。翻つて、胡錦濤(中国国家主席)以下、現下の中国政府指導層の姿勢は、キッシンジャーが相対した昔日の指導層とは異なり、「信頼関係の構築」ではなく「些事への拘泥」に傾いているようである。

正論

好感覺で

A black and white portrait of Sakurada Jun, a man with dark hair and glasses, wearing a light-colored shirt. To his right is vertical Japanese text: '見る政治学者' (A Political Scholar to Be Seen) and '講じ 東洋学園大学専任講師 櫻田 淳' (Lecturer at Toyo Gakuen University, Jun Sakurada).

中国を情緒的友好感覚で見る誤り



政治学者
東洋学園大学専任講師
櫻田 淳

「此事の外交」に傾く中国
ヘンリー・A・キッシング
ヤーは、自著『外交』（岡崎
久彦監訳）の中で毛沢東、周
恩来、鄧小平といった往時の
中国政治指導者に関して次の
ような記述を残している。

に硬直の傾きを免れなかつた
往時のソ連の対外姿勢とは
際立つた対照を成してゐた。
マーガレット・サッチャー
がミハイル・ゴルバチョフを
評した言葉を借りれば、我が
国の人々は中国に相対しなが

中国国務院副総理が来日中に
小泉純一郎内閣総理大臣との
会談を急遽、見合わせたりし
た結果、国際常識との「乖
離」を際立たせる始末であ
る。北京五輪や上海万博のよ

「外交感覚」は、江沢民選政
期を経て現在に至つて、その
劣化を露わにしている。キッ
シンジャーが多分に瞠目した
ように、周恩来や鄧小平の現
実主義的な政治手腕に惹かれた
筆者にとっても、現下の中

いる。けれどもそのような論理は、本来は国際社会の容纳されるところではない。そうであればこそ、我が国が心掛けるべきは、対中摩擦を引き起こしている諸々の難題の様相を広く国際社会の衆人環視する

にして、我が國と中國の何れに「理」があるかを客観的に判断する材料は、我が國の努力の一環として國際社會に適切に提供されなければなるまい。

対中外交は他国の共感が不可欠

我が国にとって対外外交の相手は、ただ中国一国のみではなく、日中関係の動向に影響を受ける幾多の国々である。我が国は、対中関係の運営に際して他の国々の「共感」を得すべく手を尽くさなければならぬ。我が国には、対中「感情」に眼を曇らせている暇はないのである。

我が國にどこで中國は、やは情緒的な「友好」の相手などではなく、実利と権勢の絡んだ「競合」と「提携」の相手でしかない。しかも、その「競合」と「提携」が然るべき国際ルールに則るものである以上、もし中国政府が現下の「外交感覚」の劣化を正せなければ、その後に直面するのは、自らの実利における「損失」と国際社会における「威信の低下」である。